



ひびぎ

No.39

ドラム缶工業会会報

講 演 総 括

日本の化学工業品 輸出入動向

について

本年6月に日本化学工業品輸出組合の内一(うちもと)洋ニシニア・アドバイザーに「日本の化学工業品輸出入動向について」と題する講演をお願いしました。

今回講演の総括更新版の原稿をお願いしたところ、こころよく引き受けていただきました。以下に講演総括を記しますので、ご参考にしていただければ幸いです。

平成14年の世界商品貿易は前の年のIT不況とそれに続く米国テロ事件の影響による落ち込みからプラスの成長率を回復した。WTOの報告書によると平成14年の物の輸出額は6兆2,400億ドルと前年に比べて4%増加したが、貿易数量指数は2.5%増止まりとなっている。平成15年もイラク戦争の影響による原油高、企業心理や株式相場の冷え込みの後遺症から前半は停滞、後半の回復も緩やかに留まると分析、貿易数量で3.0%増と微増を予測している。

これをOECDで見ると、平成14年第3四半期以降貿易量は減速しており、GDPも呼応して第4四半期から減速

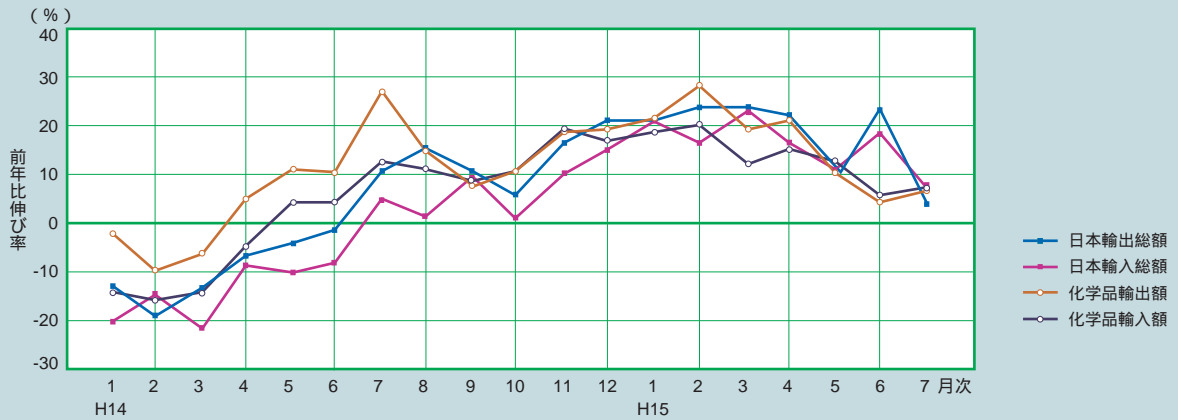
している。

一方、我が国に目を転じると、平成14年の貿易額は輸出では4,170億ドルと前年比3.4%増加したものの、輸入では3,380億ドルと前年比3.2%減少しており、世界の成長に遅れをとっている。しかし、円ベースでは為替レートが円高に振れたこともあって、輸出が前年比6.4%増と大きく伸び、輸出入共に過去最高に肉薄している。この輸出の伸びが我が国の景気の牽引役となっていたが、平成14年12月以降は伸び率が停滞し3月以降はイラク戦争、更には中国を中心とするSARS禍が影響して伸び率を大きく落としている。(表1、次ページ図1)

分野名	H14	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
日本輸出総額		27.1	30.2	36.2	33.3	32.3	35.5	36.6	34.4	37.4	37.7	37.9	37.1
日本輸入総額		25.7	24.3	26.6	27.0	27.5	25.7	30.4	28.9	28.6	30.5	30.6	30.7
化学品輸出額		2.98	3.26	3.77	3.68	3.73	3.80	3.98	3.79	3.72	3.85	3.90	4.01
化学品輸入額		2.44	2.01	2.30	2.36	2.57	2.34	2.95	2.63	2.48	2.75	2.73	2.69
	H15	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月					
		32.2	36.3	40.7	38.5	36.4	37.6	39.2					
		31.3	28.5	32.5	31.5	30.4	30.4	32.5					
		3.63	4.16	4.48	4.47	4.10	3.96	4.22					
		2.96	2.49	2.86	2.89	2.84	2.88	3.05					

表1 日本の貿易額(単位:10億ドル)

図1 貿易額の前年比伸び率



この様な環境下で日本の化学工業品貿易も順調に回復し、平成14年の輸出は前年比8.4%増加して445億ドル、輸入も1.2%増加して302億ドルと平成12年に次ぐ高い水準となっている。この輸出の高い伸びを支えたのが中国・香港を中心とするアジア地域で、特に中国・香港は前年比22%増加して85億ドルとアジア躍進の原動力となっている。また、分野で見ると平成14年4月以降の有機化学品、プラスチックの伸び率には著しいものがあり、額から見ても全体を大きく牽引してきた。しかし、この高い成長率も今年の2月までで、3月以降は原油高とその後のSARS禍

の影響によって伸び率を大きく落としている。

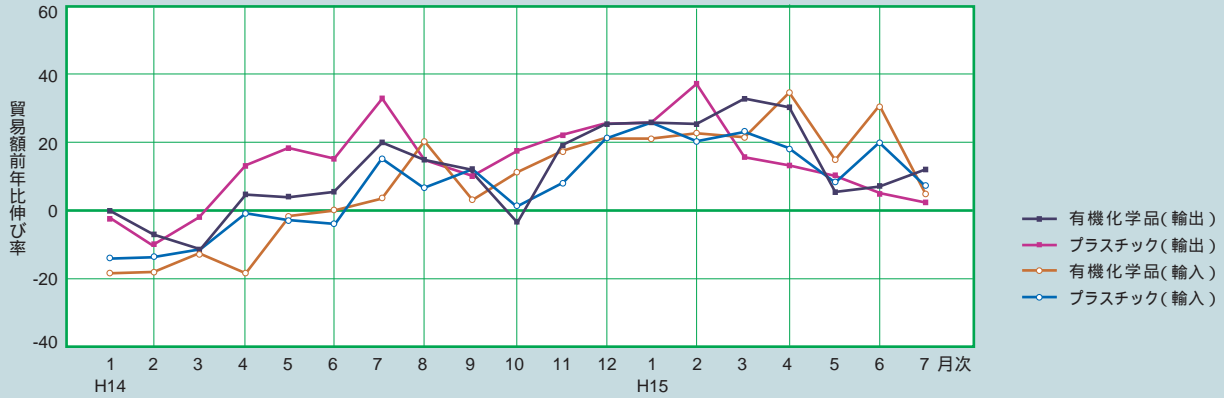
そこでもう少し詳しく有機化学品とプラスチックの動きを追って見る。昨年4月以降中国の需要拡大に支えられて輸出が大きく伸びたものの、秋口に米景気の不透明感から一時減速したが、その後は再び上昇に転じ有機化学品は今年の4月まで、プラスチックも2月まで上昇が続いた。それ以降は原油高による原料価格の高騰に製品価格が追いつかず輸出が縮小し、更にSARS禍による消費減退が追い打ちをかけたこの6月まで急速に輸出の伸び率を落としている。(表2、次ページ 図2)

分野名	H14	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
有機化学品(輸出)	848	897	959	986	945	897	964	980	1,021	941	1,015	1,043	
プラスチック(輸出)	649	711	903	861	914	912	946	910	874	943	930	942	
有機化学品(輸入)	673	553	620	585	716	581	738	703	637	820	713	746	
プラスチック(輸入)	419	364	421	456	480	431	527	463	448	467	484	471	

	H15	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
日本輸出総額	1,067	1,124	1,281	1,289	1,002	950	1,068	
日本輸入総額	816	976	1,038	980	997	949	971	
化学品輸出額	821	678	755	792	826	760	784	
化学品輸入額	524	435	519	540	520	519	566	

表2 日本の化学工業品主要分野貿易額
(単位:百万ドル)

図2 化学工業品主要分野伸び率



しかし、有機化学品分野では中国向け輸出上位を占める石化製品の一部で、合繊原料となるEG、PTA、ウレタン原料のTDI、MDIや樹脂原料となるVCMなどが6月に入って急増していたが、7月に入ると分野全体でも上昇に転じた。これらはいずれも消費関連原料であり、SARS感染の鎮静化に伴って消費が回復し中国需要の拡大に伴う輸出の増加と考えられる。また、一時は年末の原油価格の高騰に伴う原料価格上昇でポリエステル設備の稼働を止めた地域もあって原料輸出が落ち込んだ時期もあったが、イラク戦争の終結と共に原料価格も沈静化し設備は再稼働して需給も戻っている。

また、樹脂分野でも中国の主要汎用樹脂輸入量は2月以降急速に落ち込んだが、5月以降急速に持ち直している。背景には原油価格の反転で先安感が消え、在庫取り崩しが進んだためと見られている。ところが日本からの輸出は4月に入ってやや回復の兆しが見えたものの、その後は再び減少傾向にあり7月に至っている。背景にはポリオレフィンなどでカタールやサウジなどの大型新鋭設備から生産される競争力の高い製品に押されている面も見逃せない。また、PPがインドから中国向けに急増しているなど、汎用樹脂の輸出環境には厳しいものがある。

(図3、次ページ 図4)

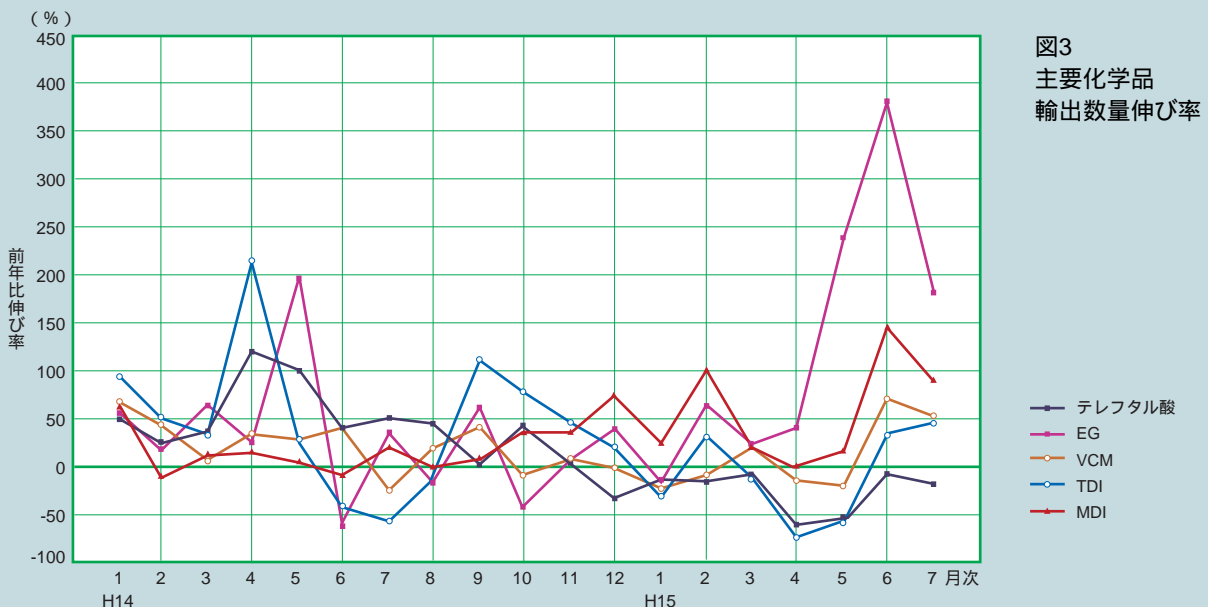
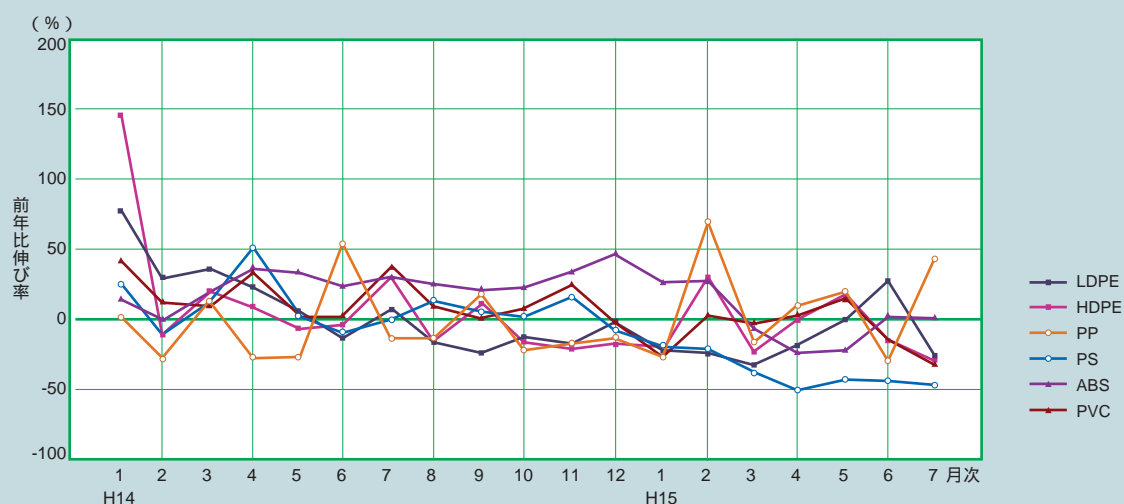


図3 主要化学品 輸出数量伸び率

図4 主要汎用樹脂輸出数量伸び率



輸入については、有機化学品、プラスチック共に昨年12月以降前年比20%増前後と高止まっているが、中でも輸入上位のPE製袋が前年に比べて大幅に増加していることが注目される。特に、中国からの輸入は前年比26.9%増と顕著な伸びを示し、一段と中国製品の競争力が強まっている。背景には国内ユーザーの低価格品選好と現地メーカーや日本の海外進出メーカーによる生産拡大がある。

懸念材料としては、最近の中国におけるアンチダンピング課税の動向で、石化製品を中心に矢継ぎ早にダンピング仮決定が出されており、イラク戦争やSARS問題が片付いてやや上向きかけた石化製品輸出にどう影響するか今後を注目する必要がある。7月現在、仮決定の出されたカプロラクタム、無水フタル酸、SBR、PVC、TDI、MDIなどに影響は認められず、むしろカプロラクタムはこの数ヶ月大きく伸びており、無水フタル酸、TDI、MDIなどは6月に入って急増している。今後の動向が注目される所である。

これまで化学工業品貿易で主要な分野を占める有機化学品とプラスチックに焦点を絞って動きを見てきたが、エチレン換算の国内需給の落ち込みが続く中で、7月に入って輸出にも曙光が差したところである。世界のエチレン需給予測はアジアで不足ポジションが続くとされているが、欧米大手の中国進出がこれから始まろうとしている中で、日本は今後苦しい競争を迫られよう。一方、制度面では最近の中国による化学品に対するダンピング調査問題や最近の自由貿易協定の進展に見るように化学工業品貿易を取り巻く環境も複雑さを増しており、今後の予測を難しくしている。短期的には為替レート、原燃料動向、SARS問題も考えられていたほど深刻化するには至らず、中長期的問題である大型設備の建設と需給バランスや制度上の問題も日本の石化製品の国際競争力を除けば大きく流れを変えるような要因とは考えられず、WTO年次報告書が言うように平成15年も不透明であるものの通年で見れば平成14年と同じか、わずかに上回る程度と言ったところかも知れない。

講師 内一洋二氏 略歴

1. 三井化学名古屋工業所を振り出しに、15年余り、泉北、大竹、大阪、大牟田工業所で塩ビ樹脂の原料である二酸化エチレン、塩ビ、メタン塩化物、汎用4樹脂の一つであるポリプロピレン、染料の原料である二塩化ヒドロソベンゼン、染料中間体、アニリン等の企業化プロジェクトに参画。その間、エチレン、塩化ビニルモノマーの海外技術輸出に参画。
2. 本社に戻って15年有余、基礎化学品企画管理部、樹脂事業本部で、汎用樹脂の開発、企画、技術管理関係の業務に携わる。
3. その後日本化学工業品輸出組合に移って6年余り、化学品輸出入にかかわる調査業務に携わる。平成15年9月末日本化学工業品輸出組合退社。



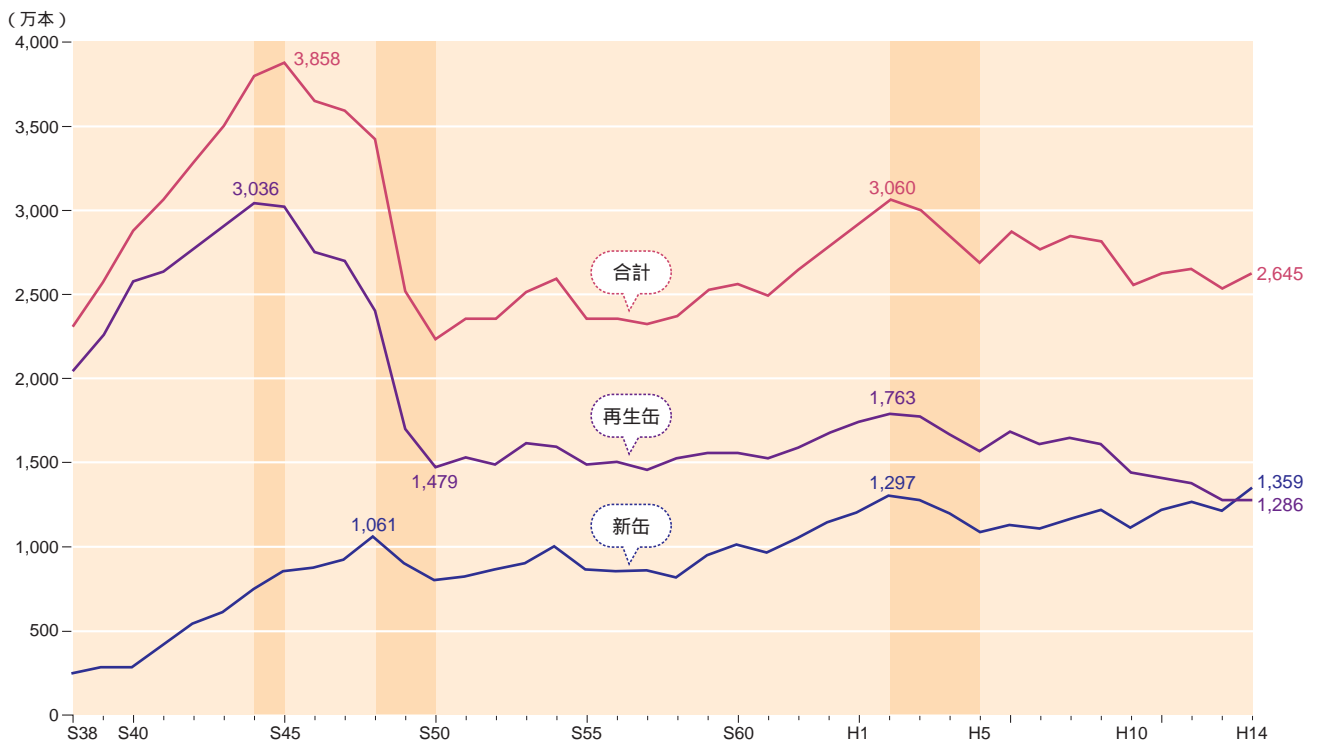
200Lスチールドラム缶 出荷本数及び内容物構成比推移

I

200Lスチールドラム缶出荷本数推移（新缶、更生缶別）

下のグラフは昭和38年以降の新缶・更生缶ドラム出荷量の推移を示したものです。これを見ると昭和40年代まではドラム缶の主たる担い手は更生缶でした。ドラム総出荷は昭和45年の3,858万本（新缶848万本、更生缶3,011万本）をピークに更生缶を中心に急減します。昭和50年代以降、景気変動

の影響を受けつつも、比較的安定した出荷推移をたどっています。これは新缶が昭和48年に初めて1,000万本の大台に乗せた後安定的に出荷量を伸ばし、特に平成14年は漸減傾向の更生缶を上回る水準までになったことが大きく影響しています。



200L スチールドラム缶 出荷本数及び内容物構成比推移

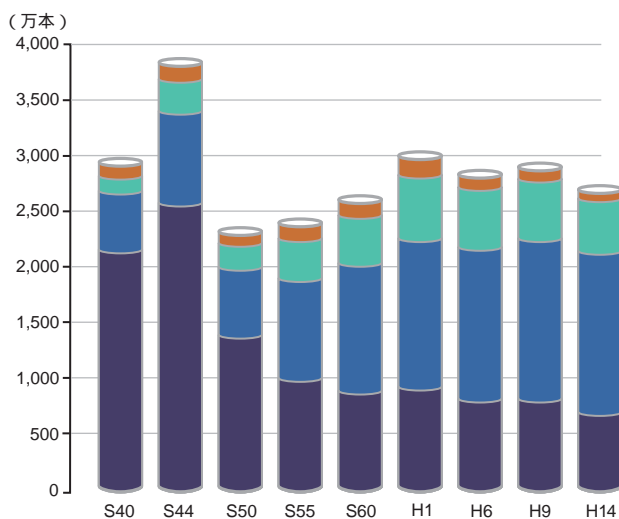
Ⅱ

内容物別構成比推移

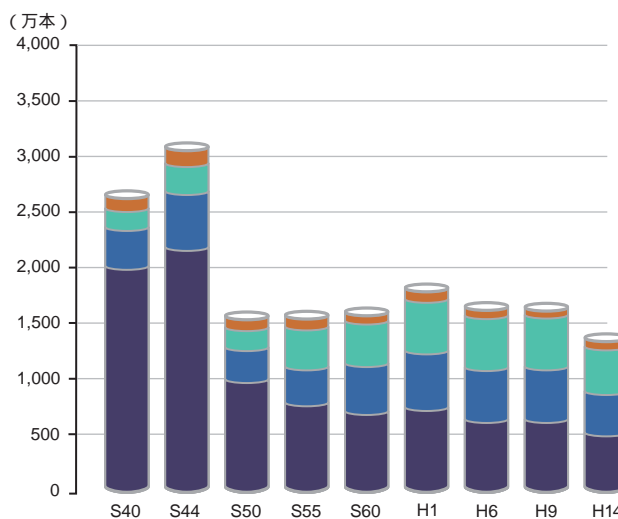
下の棒グラフはドラム缶の内容物の推移を新缶・更生缶別に調べたものです。更生缶の出荷推移は石油向け出荷量と連動していますが、昭和40年代から50年代にかけて急減しているのは重油・アスファルト、灯油等がドラム缶から、ローリー等に替わったことが最大の要因です。その後も石油関係

の需要は漸減傾向にあります。一方、新缶は昭和50年代後半から化学向けをテコに出荷増基調を継続しており、平成14年は1,350万本を越える水準となりました。本年上期もこの傾向は変わらず、引き続き化学向けを中心とした高出荷が見込まれます。

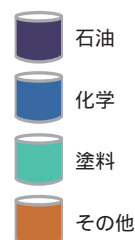
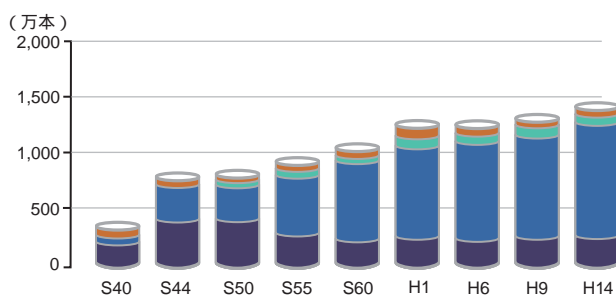
1. 全体(更生缶 + 新缶)



2. 更生缶



3. 新缶



鋼製ドラムは “リサイクルの優等生” リユース比率58.3%

ドラム缶リユース&リサイクルフローチャートの更新について

鋼製ドラムは使用後、大半は更生業者によって回収されますが、一部はユーザーから直接スクラップ処理業者に回収されています。更生業者に回収されたものは、残渣処理、整形、内部洗浄などの更生工程を経て再度使用されます。ドラム缶は、通常これを繰り返し、3~5回使用したあとは、スクラップ処理され、処理業者に直接回収されたものと合わせ、製鉄所に運ばれ、新たに「鉄」として生まれ変わります。ドラム缶業界はこのように古くからリユース及びリサイクルが確立しており、鋼製ドラムは循環型リサイクルの優等生と言えます。

下の図は左で述べた鋼製ドラムのリユース&リサイクルフローチャートの平成14年度版です。このチャートは平成9年12月に新缶と更生缶の連絡会である“ドラム缶協議会”で初めて作成し、平成13年に平成12年度ベースで更新しました。改定の都度少しずつ精度が上がってきていると思います。今回の改訂の特徴は、輸出及び国内充填について新缶と更生缶の内訳を明示したことです。基本的な流れは変わっていませんが、日本経済の低迷を反映して新缶、更生缶を併せた日本のドラム缶市場(国内充填)は作成当初の平成9年から比べると1,550千本、5.5%縮小しており、非常に厳しい状況になっていますが、今後も新缶、更生缶の両工業会で力を合わせ、ドラム缶市場の拡大に努めると共に、ドラム缶の供給責任及び使用済みドラム缶の回収責任を果たすことにより、日本経済の発展のために微力を尽くしていきたいと考えております。

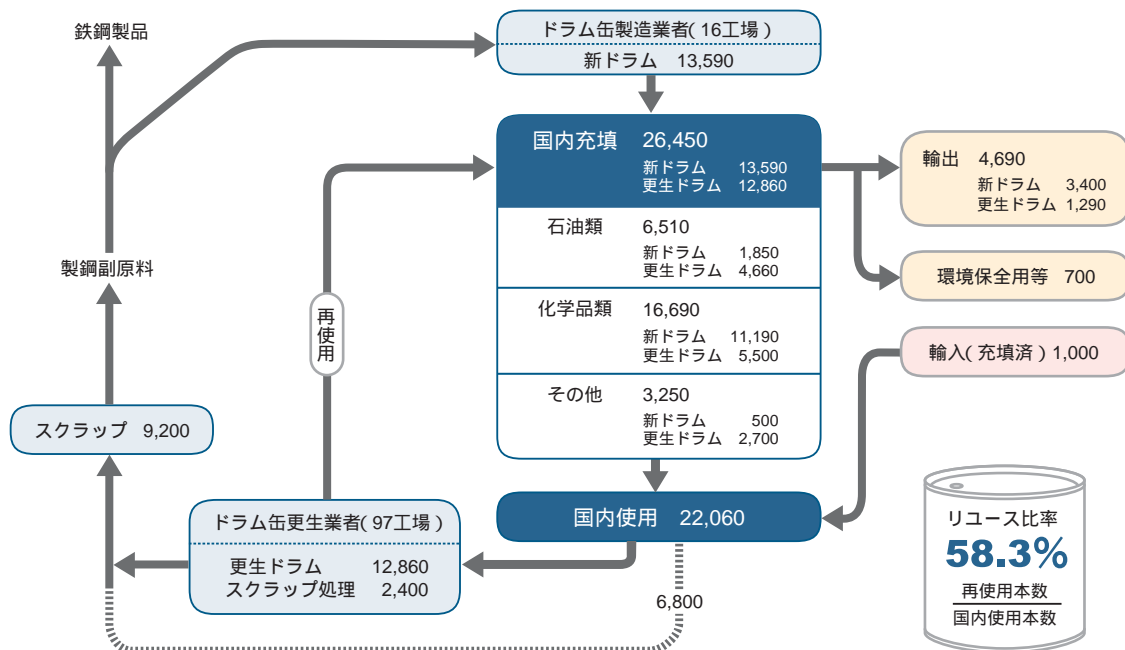
なおドラム缶は環境保全用ドラム缶を除くと実質的に100%リサイクルされていることから、今回からリサイクル率は表示しなくなりました。

		当初(平成9年)	12年度ベース	14年度ベース
1. 工場数	新ドラム	18工場	17工場(1)	16工場(1)
	更生ドラム	123工場	107工場(16)	97工場(10)
2. 製造本数	新ドラム	12,000千本	12,800千本(+6.7%)	13,590千本(+6.2%)
	更生ドラム	16,000千本	13,800千本(-13.7%)	12,860千本(-6.8%)
3. 国内充填本数		28,000千本	26,600千本(-5.0%)	26,450千本(-0.6%)
4. 国内使用本数		26,000千本	24,300千本(-6.5%)	22,060千本(-9.8%)
5. リユース比率		61.5%	56.8%(-4.7%)	58.3%(+1.5%)

(注) リユース比率は分母を国内使用本数、分子を更生ドラム製造本数として計算しております。

200L 鋼製ドラム缶リユース&リサイクルフローチャート(平成14年度ベース 単位:千本)

ドラム缶協議会作成(平成15年7月)



JSDAマークは ご活用いただいておりますか？



ドラム缶工業会前専務理事
柴野正裕氏

「JSDA」マーク表示が平成2年12月にスタートしてから13年近く経過しており、ドラム缶の需要家には既に認知されていると思っていたが、必ずしもそうではないとのことで、この制度を設定した趣旨を改めてご説明し、是非ご活用願いたいと思います。

危険物運送の国際基準である国連勧告基準を取り入れた消防法の「危険物の規制に関する規則」が昭和62年12月に改正された。ドラム缶工業会は危険物容器対策委員会を中心に新容器性能基準への対応をすすめたが、従来の製造方法では落下性能が適合しないことが判明した。

その解決策は巻締部の多重巻方式への改良であるが、これは技術導入に頼らねばならず、業界全体が即応できる状況にはなかった。そこで消防庁、危険物保安技術協会（KHK）及び需要家団体（社）日本化学工業協会他との協議を重ね、基準適合ドラム缶の製造が可能になるまでの経過措置として、昭和63年12月から同協会にて試験確認を受け、KHKマーク付きのドラム缶を出荷することとした。

平成2年10月、業界レベルでの基準適合ドラム缶の出荷態勢が整ったのを機に、同協会での試験確認業務を終了し、同11月からドラム缶製造各社による自社検査を実施し、適合缶には、「試験結果報告書」を添付し、併せて同12月には工業会で制定した「JSDA」マークを表示したドラム缶を出荷した。

消防法では、運搬容器の基準適合に関する試験確認者等についての規定はなく、また、表示は規則第44条に「収納物の品名、危険等級、数量、注意事項（火気厳禁等）等」を運搬容器の外部に表示することと規定されているが、容器性能に関する表示の規定はない。（IBCは規定がある）

工業会は、消防庁、需要家団体に対して、ドラム缶の取扱者が基準適合容器であることを外見で識別出来る方策として「JSDA」マークの表示を提案し、両者からの了承を得たので、このマーク表示制

度を自主的に実施することとし、今日に至っている。

工業会会員各社は、自社で製造した危険物容器の缶種別に「検査結果報告書」を定期的に工業会へ提出し、審査の上適合缶については「JSDAマーク」表示許可書を発行している。ちなみに、本年10月末現在の表示許可書の発行件数は、383缶種となっている。

ドラム缶使用者の中には、危険物運搬容器は「UNマークが付いていないとダメ」との認識をお持ちの方もおられるとのことなので、ここで危険物運搬に関する規制を確認しておきたい。

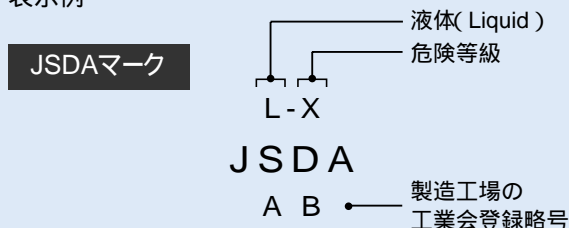
我が国の法令では、輸送方法（モード）によって規制が異なり、危険物を海上又は航空で輸送する場合、荷送人は（財）日本船用品検定協会（HK）で検査を受け、UNマーク付き容器の使用が「危険物船舶運送及び貯蔵規則（危規則）」第6条第3項で義務付けられている。

陸上の道路運搬は、消防法又は毒劇法が適用される。消防法は前述のような規定となっており、また、「毒物及び劇物の運搬容器に関する基準-その3」では、容器の試験確認実施者は特定されてない。

このような危険物運搬容器に関する輸送モード別の規制を踏まえ、危険物の陸上運搬には、コストの削減も含め、工業会で危険物運搬容器の安全性確保の見地から制定した「UNマーク付き」と同等の性能を有する「JSDAマーク付き」のドラム缶を是非ご使用下さるようお願い致したい。

注：JSDAは（Japan Steel Drum Association・ドラム缶工業会）の略称

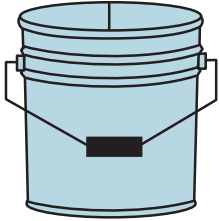
表示例





第3回 輸送編

パール缶のお話し



製缶したパール缶は倉庫の仮置き場からフォークリフトを利用してトラックに積み込みます。通常はご注文頂いた納期の前日夕方に積み込みを行い、翌日お客様へお届けするよう段取りしています。場合によっては当日積み込んで、お届けする場合があります。

パール缶は表面が金属印刷されていますので、美観を保つため積み込み・輸送・荷下ろしには大変気を遣っております。特に輸送途上におけるキズ防止のため、緩衝材を使用しております。

通常はテーパータイプで1,500~2,000缶を1ロットとして、4t車で輸送します。タイト缶は積

み重ねができないため800~1,000缶までしか積みません。

小ロットの場合には同一方面のお客様向けに積み合わせを行っています。場合によっては宅配便や路線便を使いますが、別途費用がかかります。

パール缶輸送はよく、「空気を運んでいるようなものだ」と言われるように、軽くて高張るモノを運んでいます。そのため少しでも輸送効率を上げるよう工夫しておりますが、お客様におかれましても、発注ロットをまとめていただくよう何卒ご協力お願い致します。

ドラム缶から コラム感

ユロップ雑感

1995年にICDMの会長職が日本の順番になり、JSDAの理事長であったので、3年間会長を務めました。最初の総会と役員会は、ベルギーのブルジョで、その後フランスやアメリカで役員会が有り現地の人々と仕事や遊びの付き合いがありました。

その経験を生かして、リタイア後は個人作成「バック旅行」を楽しんでいます。少々費用はかかりますが、同じ所に何泊も出来るしお仕着せの土産物店に行く必要もないし、食べたくなかない「豪華」ディナーに行くこともありません。

2001年と02年の旅行で、ユロ導入前と後を経験しました。通貨変更の機会に便乗の値上げがあったり、国によって物価やサービスレベルの違いがはつきりするもので、便利ではあるが、又大変な面もあると感じました。

いずれにせよ、あれだけの大事業をやったのけたことは大したもの。ある程度のことば目をつぶして妥協して実行する必要があります。我が国では細かいことにけちをつけて改革に反対する人が多いと思います。

EUのあれだけ多様な国は纏めるのは難しいでしょうが良くやっていると思います。



永井 潤

ドラム缶工業会第14代理事長
[平成6年6月 - 平成8年6月]
ICDM(国際ドラム缶製造業者連合会)会長
[1995年11月6日(ブルジョ総会)
~1998年9月28日(フロリダ総会)]

色々争ったりする様に外からは見えませんが、実際は仲は良いし、又そこでなければやって行けないという、自分達の存在意義に対する意識が強いからでしょう。その多様さについて、ベルギーのブルジョで売っている絵葉書の『EU15ヶ国の良い所』の話の本を読みましたので紹介します。お分かりの様に事実の逆さまでです。

アイランド人のように、いつもらふでイギリス人のように、料理が上手でフランス人のように、いつも謙虚でイタリア人のように、秩序正しく、ドイツ人のように、ユロを解し、オランダ人のように、気前良く、ベルギー人のように、勤勉で、デンマーク人のように、思慮深く、スウェーデン人のように、柔軟で、フィンランド人のように、おしゃべりで、スペイン人のように、地味で、ポルトガル人のように、技術に強く、オーストリア人のように、忍耐強く、ルクセンブルク人のように、有名で、ギリシャ人のように、組織化されている。

平成15年度上期出荷実績

平成15年度上期出荷実績は、下の表に示す通り、200L缶で前年同期に比べ、106.4%と6.4%の増となりました。需要分野別では、前年同期比で石油は117.0%、化学は104.9%、塗料116.0%、食料品121.2%と全体の77.0%を占める化学は4.9%増、14.7%を占める石油は17.0%増となりました。

ペール缶は前年同期比97.7%と2.3%の減となりました。用途別でも、全体の49.9%を占める石油が3.1%減、43.2%の化学は1.3%減、実数で257千本の減と、200Lドラムと異なる荷動きとなっております。

ペールタイプを含めた中小型缶は、前年同期と比べて100.8%の821,558本となりました。

単位：千本

缶種	用途	石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年同期比(%)
200L缶		1,024	5,383	345	96	129	6,977	106.4
ペール		5,573	4,822	458		315	11,168	97.7
100L缶		3	67	7	1	2	80	90.5
50L缶			137		4	31	172	112.4
アス缶型			3				3	0.0
その他の容量缶		1	262	微		8	271	97.8
200L缶	亜鉛鉄板缶		31	微	1	4	36	90.5
	ステンレス缶		9	1	1	4	15	182.0
	小計		40	1	2	8	51	105.7
中小型缶	亜鉛鉄板缶		66			54	120	112.5
	ステンレス缶		3			1	4	76.9
	小計		69			55	124	111.1
合計		6,601	10,783	811	103	548	18,846	101.0
前年同期比		99.5	101.6	111.6	127.2	89.8	101.0	-
構成比		17.4	74.2	4.8	1.3	2.3	100.0	-

(注)構成比は、ドラム缶の出荷トン数の構成比。

業界動向

▶ ドラム缶工業会役員の変動(平成15年10月22日付)

副理事長 辻元 康作氏(ダイカン(株)前社長) 今井 忠氏(日鉄ドラム(株)社長)
 常任理事 今井 忠氏(日鐵ドラム(株)社長) 里 卓郎氏(ダイカン(株)社長)

▶ ICDM会長の交代(平成15年10月2日ワシントンD.C.総会にて交代)

フランシスコ・デ・ミゲル氏(グライフ社) マーク・ベストラーテ氏(プラグデン社)

ドラム缶工業会50年史発刊にちなみ、
投稿原稿をいただきましたので、ご紹介させていただきます。
筆者は去る6月にダイカン株式会社を退社されました阿部肇氏です。

「ドラム缶工業会50年史発刊によせて」

工業会50年史を送っていただき、早速に拝読しました。戦前から戦中、戦後にかけての業界の動きについては特に興味深く読ませていただきました。そして、これに触発されたというわけではないのですが、私どもの会社の草創期のことを書き綴ってみました。大阪の片隅で80年以上生きてきた小企業のことですが、お読みいただければ幸いです。

私どもダイカンの前身である大阪製罐所の創業者は、吉房仁三郎という25歳の青年です。実家の吉房家は大阪天満の大地主で米屋を家業としていましたが、仁三郎の父、庄次郎の時代には「樽屋」という樽屋を兼営しておりました。仁三郎は次男で岩井商店に勤めていましたが、25歳のときに独立し、固形ペイント用の鉄製丸缶の製造を始めました。大正8年(1919年)のことです。これが大阪製罐所の創業で、場所は旧淀川の都島橋の上流の長柄(ナガラ)という所です。今は高層住宅が林立する淀川リバーサイドタウンになり、当時をうかがわせるものは全くありませんが、ここには昭和58年に現在地(此花区)に移転するまで私どもの本社工場がありました。仁三郎は岩井商店の時代に塗料の仕事に携わっていたようで、その関係もあったのでしょうか、事業は順調に伸び、昭和10年(1935年)には資本

金60万円の株式会社に改組しました。同時にその頃から化学品の先進国でありましたドイツに単身で化学品容器の視察に出かけました。彼はよほど進取の気性に富んだ人だったのでしょうか。帰国後に「ドイツ式口輪オープン罐」と称して内レバー式のオープン缶を売り出しました。この缶は塗料及び染料用には大きさも手頃(5~10L)で、取扱いも簡単ということで爆発的にヒットし、その後の当社の発展の基礎になったといわれています。

その間、わが国は次第に戦時色の濃い時代に移って行きました。当社も昭和14年に海軍の要請で航空燃料用の大型ドラム缶の製造を始め、16年からは軍需工場に指定され、専ら大型缶の製造一辺倒になったようです。そしてこの年に創業者の仁三郎は47歳の働き盛りで病死しています。時代の流れとはいえ、自らの半生を懸けた小型缶が思うように作れなくなった落胆からかもしれません。

平成15年6月

阿部 肇

(ダイカン株式会社前会長)



「ひびき」への 投稿の ご案内

「ひびき」読者からの投稿を募っております。どうぞふるってご応募ください。
内容は「ひびき」に対するご感想など何でも結構ですが、本年3月に発行した工業会50年史にちなんだ原稿を特に歓迎します。各社の生い立ち、昔のエピソードなどドラム缶にかかわることであれば何でも結構です。なお応募に際しては、会社名・お名前をご記入ください。投稿多数の場合は、企画委員会の選考により順次掲載させていただきます。



協和容器株式会社
取締役社長
大野 良司

創業は昭和16年(1941年)。日本の石油発祥地となる新潟で天然ガスや石油化学の産業が発展したことで、アスファルトやヨードなどを充填する工業用の木樽生産を手掛けたのが創業の始まりといわれている。戦後、株式化を図り、順調な操業を続けていた。しかし、設備の拡張を終えたところに新潟地震(1964年)で被災。同社設備にはあまり被害がなかったものの大手の需要家数社が打撃を受けて、受注が激減し、厳しい状況下におかれた。困っていたところに旧鋼管ドラム(現JFEコンテナ)がバックアップ、そのグループ会社となった。「鋼管ドラムの関連子会社として頑張ってきたが、今年4月に川鉄コンテナと鋼管ドラムが合併したことで現体制に。これからはJFEコンテナの一員として存在感を表していきたい」と、6月末から協和容器の舵取りを任せられた大野良司社長。ちょっと越後の覇者、上杉謙信侯に似てはいないか。

経営者として

「特長を引き出していくのが当面の課題」で、協和容器は新缶メーカーとして唯一日本海側にある企業として、この立地を生かすこと。そして、20~200L缶のドラム生産を行う中で、サビの心配がないステンレスドラムや耐薬品性能を高めるためポリエチレンを粉体コーティングしたポリマイトドラムなどがある。これら製品の知名度は高く、特殊缶の生産にエネルギーを集中させる方針を打ち出している。その設備増強は随時、実施しているが、社員三十数名という所帯の中で、スタッフの有効的な総合活用にも取り組んでいる。また、「メーカーである以上、品質第一優先は貫く。それには前向きな姿勢が大事」とも。

モットー

誠実。

* * * * *

協和容器の社長就任前は鋼管ドラムに席を置いていた。新潟への赴任はこれが初めてで、これまで神奈川県湘南から1時間半かけた電車通勤が、車で5~10分と大きく生活リズムが変わった。「通勤時間に雑誌や単行本、新聞も読むことができたが、今、その時間がなくなり、とくに本を読むことが少なくなった。ただ、家庭にいる時間が多くなったというメリットも生まれ、今まで見なかったドラマや夫婦の会話も増えてきた」と、語る。湘南の家は娘夫婦が住み、奥様との二人だけの新生活も充実しているようす。また、「新潟を始め北陸には食べ物やおいしい御酒が豊富。それに温泉が多く、ドライブがてらよく出掛けている」と、その中でもお奨めは、「日本海に沈む夕日が見える瀬波温泉は、素晴らしい」と、PR。一度、出かけてみたくなる。

会 員

JFEコンテナ(株) 協和容器(株) 斎藤ドラム缶工業(株) 山陽ドラム缶工業(株) 新邦工業(株) ダイカン(株)
大同鉄器(株) (株)東京ドラム罐製作所 東邦シートフレーム(株) (株)長尾製缶所 日鐵ドラム(株) (株)前田製作所
森島金属工業(株) (株)山本工作所 (株)ユニコン

《賛助会員》

エノモト工業(株) 三恵マツオ工業(株) 丹南工業(株) (株)大和鐵工所 三喜プレス工業(株) (株)城内製作所
東邦工板(株) (株)水上工作所

ドラム缶工業会 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10 (鉄鋼会館6階)

TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969

e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp

URL : http://www.jsda.gr.jp/

ひびき

No.39(平成15年11月20日発行)

発行人 ドラム缶工業会

専務理事 藤野 泰弘